

教職実践科目におけるポートフォリオ学習の試行[†]

村松 和彦*・南 伸昌*
宇都宮大学教育学部*

学校教育教員養成課程と総合人間形成課程の2つの課程から構成される本学の教育学部は、その特色として各々の課程の学際的な専門知識を補完し合う互恵関係があげられる。学校教育教員養成課程においては、A 実践的指導力、B 専門的力量、C キャリア意識の3つを柱に、総合的な「専門的力量」「実践的指導力」を兼ね備えた質の高い教員を育てるというトライアングル・プリズム構想のもとで学生の教育を行っている。平成 25 年度より開講となる本学の教職実践演習は、1 年次から3 年次までのポートフォリオ学習の積み上げの上に行われることになっており、そのために今年度は1 年次の教職入門セミナーでポートフォリオを導入し、2 年次と3 年次の教育実習で試行を行った。

キーワード： 教職科目、ポートフォリオ、教職実践演習、文部科学省

1. 本学のポートフォリオ学習について

本学の1～3 年次の教職実践科目は以下の内容で実施される。1 年次の教職入門セミナーは、4 つの附属学校園教員と宇都宮市教育委員会指導主事の講話、小・中学校の観察、グループごとに教師像を深める討議活動からなっている。2 年次は観察を中心とした1 週間の小・中学校教育実習Ⅰ（以下「実習Ⅰ」）、3 年次は小中に分かれて授業を行う3 週間の小・中学校教育実習Ⅱ（以下「実習Ⅱ」）である。

ポートフォリオ学習は、今年度から1 年次の教職入門セミナーで本実施となり、小学校・中学校における実習Ⅰ、小学校における実習Ⅱの学生を対象に試行を行った。本学のポートフォリオ学習の形式は、年次ごとに A4 の紙ファイルに達成目標及び自分の課題と各々の評価・総括評価をまとめた表と、自己評価・他者評価を裏付けるもととなる、講義での配布資料や演習の記録、観察記録、指導案、教育実習日誌など全てを綴じ込むものとした。

2. ポートフォリオ学習における達成目標と学生が設定する「自分の課題」及び振り返り

(1) 達成目標と「自分の課題」の設定

ポートフォリオの達成目標は、図1のように「教師に求められる4つの事項」¹⁾を主軸に、本学教育学部 DP、そして栃木県教育委員会の教員評価区分

[†] Kazuhiko MURAMATSU*, Nobumasa MINAMI*
: Trial of portfolio study in teacher-training courses

* Faculty of Education, Utsunomiya University

行動基準」（キャリア段階1、教職経験5年以内の文言）²⁾の3つをマトリクスとして、そこに学校教育教員養成課程の DP を当てはめ、教職入門セミナーでの講義や演習、実習ⅠとⅡそれぞれの実習内容に応じて1つの年次につき16項目を設定した。

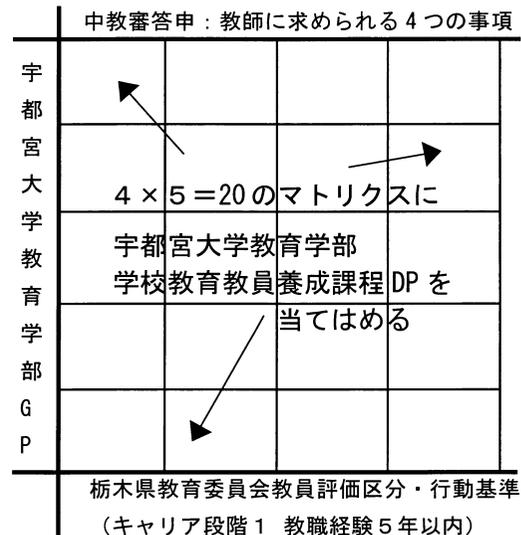


図1 16項目の設定

4つの事項各々の達成目標は、授業に応じて文末を中心に表現を変えた。また実習Ⅱについては附属学校園の実習評価表を学生向けに改変し、附属小学校の学生のみ実習開始時に配布した。表1に実習Ⅰの、表2に実習Ⅱのポートフォリオを示す。何れのポートフォリオもガイダンスや事前指導時に配布し、受講生が学習の見通しを立てられるようにした。

ポートフォリオ:教育実習Ⅰにおける達成目標・課題設定及び評価表

教育実習Ⅰは、①授業観察・参加 ②学級・学校観察 ③他校園観察 ④研究授業観察の4つの活動から成り立っています。中央教育審議会答申は教員養成に係る大学の4年間の学びで、①使命感や責任感、教育的愛情 ②社会性や対人関係能力 ③幼児児童生徒理解 ④教科等の指導力の4つを身につける事項としています。教育実習Ⅰとして、以下の表に挙げる達成目標と自分の課題をもとに学びを進め、自己評価を行いましょう。

- 【評価の仕方】
- ①～④の各々の活動が始まる時に、達成目標を参考にして自分の課題を記入します。
 - 各々の活動で配布されるプリントへの記入や観察の記録、自分で集めた資料、レポートなどをファイルしておきます。
 - 各々の活動が終わったら評価の欄 A B C のあてはまるものに○をつけます。(A:十分にできた B:おおむねできた C:あまりできなかった)
 - 総括評価は教育実習Ⅰでの活動全ての学びを振り返って評価を行います。(評価理由を簡潔・明確に記入します。)

| 活動 | 文科省 | 達成目標 | 評価 |
|----------|--------|--|----------------|
| ①授業観察・参加 | ① | ・教師の使命や教育的愛情について理解し、子どもの成長・発達にかかわりたいという気持ちを持てる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・教育現場にふさわしい容姿、服装、礼儀、誠実な態度で授業観察をすることができる。(②③④共通) ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・教育現場の実態や授業の子どもの様子、児童生徒指導上の課題を理解し自らの課題を持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・子どもの学習面における発達及び課題を理解し、学習指導を行う上で自らの課題を持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ②学級・学校観察 | ① | ・教師の使命をより深く自覚し、子どもに教育的愛情を持って接することができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・教師の協働、学級・学校運営上の役割についての理解を深めることができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・教育現場の実態と子どもの生活面における発達を理解し、児童生徒指導上の実態を理解できる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・教育現場が子どもの学習面を支える状況を理解し教育実習Ⅱへの心構えを持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ③他校園観察 | ① | ・様々な発達段階における教師の使命や教育的愛情についてより深く理解する。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・発達段階の異なる学級・学校園運営や教師の協働をとらえ、グループ発表で自他の考えのよさを認め合う。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・授業や活動、校園の生活を観察して、幼児児童・生徒指導における各々の実態と課題を理解することができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・子どもの学習面における発達段階や学習指導上の課題を理解し、それへの取組を理解することができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ④研究授業観察 | ① | ・教師の使命の理解や子どもへの教育的愛情という観点から研究授業を参観することができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・研究授業参観によって教育実習Ⅱに向けて教師(実習生)の協働のあり方がわかり、授業研究会で自分の考えを発表する。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・教育実習Ⅱに向けて①②③で得た幼児児童生徒指導上の実態の把握と課題解決に向けて学部の授業に取り組む意欲を持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・教育実習Ⅱに向けて①②③での学習指導上の実態や課題解決に向けて学部の授業に取り組む意欲を持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| 総括評価 | (評価理由) | | A B C |

表 1 教育実習Ⅰにおける達成目標・課題設定及び評価表

ポートフォリオ:教育実習Ⅱにおける到達目標・課題設定及び評価表

教育実習Ⅱは、①授業(教科等の指導) ②児童生徒指導 ③研究授業(立案・実践及び授業研究会)の3つの活動から成り立っています。中教審審申は、教員養成に係る大学の4年間の学びで、①使命感や責任感、教育的愛情 ②社会性や対人関係能力 ③幼児児童生徒理解 ④教科等の指導力の4つを身につける事項としています。教育実習Ⅱとして、以下の表に挙げる到達目標と自分の課題を元に学びを進め、自己評価を行いましょ。

- 【評価の仕方】 1. ①～④の各々の活動が始まる時に、到達目標を参考にして自分の課題を記入します。
 2. 各々の活動で配布されるプリントへの記入や観察の記録、自分で集めた資料、レポートなどをファイルしておきます。
 3. 各々の活動が終わったら評価の欄 A B C のあてはまるものに○をつけます。(A:十分にできた B:おおむねできた C:あまりできなかった)
 4. 総括評価は教育実習Ⅱでの活動全ての学びを振り返って評価を行います。(評価理由を簡潔・明確に記入します。)

| 活動 | 文科省 | 到達目標 | 評価 |
|-----------------|--------|--|----------------|
| ①授業 | ① | ・教師の使命や教育的愛情を持って、授業中の子どもにかかわることができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・教育現場にふさわしい容姿、服装、礼儀、誠実な態度で授業を行うことができる。(②③④共通) ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・子どもの発達や学級集団の実態をもとに学習指導案を書くことができる。また、授業における児童生徒上の課題解決に向けて努力する事ができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・子どもの学習面における発達に応じた授業を行うことができる。また、学習指導を行う上での課題解決に向けて努力する事ができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ②児童生徒指導 | ① | ・教師の使命や教育的愛情を持って、生活場面上で子どもにかかわることができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・子どもや学級集団の実態に応じて担任教師や実習生と協力しながら、子どもの指導を行う事ができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・子どもの生活面における発達や学級集団の実態を深く理解し子どもの指導を行う事ができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・子どもの学習面を支える状況を理解し、自分なりの課題を持って解決に向けて努力する事ができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ③研究授業の立案実施及び研究会 | ① | ・子どもの様々な発達段階における教師の使命や教育的愛情についての理解の上で、研究授業の立案・実践及び授業研究会への参加を行い、さらに教師の使命の自覚や教育的愛情を深めることができる ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ② | ・研究授業の意図を理解し、協働して立案・実践を行い、授業研究会では授業や授業における児童指導の改善について建設的な意見を発表できる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ③ | ・研究授業の立案・実践及び授業研究会で得た学習を支える児童生徒指導上の課題の解決に向けて、学部の授業や個人の研修、卒業論文などに取り組む意欲を持つことができる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| | ④ | ・研究授業の立案・実践・授業研究会で学習指導のあり方を理解し、そこで得た学習指導上の課題解決に向けて学部の授業や個人の研修、卒業論文などに取り組む意欲を持てる。 ・(自分の課題) | A B C A B C |
| ④勤務 | ①② | ・礼儀正しい態度で誠実に仕事に取り組む。 | A B C |
| | | ・かたよがない見方・考え方で公正に勤務する。 | A B C |
| | | ・職務・勤務の在り方を自覚し厳正に勤務する。 | A B C |
| 総括評価 | (評価理由) | | A B C |

表2 教育実習Ⅱにおける達成目標・課題設定及び評価表

学生はこうした達成目標に基づいて、自分を振り返り、自分だけの課題を設定した。本研究では、9月に実施した教育実習Ⅰ、Ⅱのポートフォリオに関して検討を行い、教職入門セミナーに関しては別の機会の報告とする。4つの事項を基にした達成目標のうち、実習Ⅰにおける「授業観察・参加」と「学級・学校観察」、実習Ⅱにおける「授業」と「児童生徒指導」の各々の活動について、学生が作った課題を以下に紹介する。

【使命感や責任感、教育的愛情について】

実習Ⅰ「授業観察・参加」の達成目標「教師の使命や教育的愛情について理解し、子どもの成長・発達にかかわりたいという気持ちを持てる。」に関して学生が設定した課題の代表的なものは、「教師として、授業内で果たすべき責任（みんなで授業をするように心掛ける等）を理解できる。」といったものであった。また、実習Ⅱ「授業」の達成目標「教師の使命や教育的愛情を持って、授業中の子どもにかかわることができる。」では、「どの子どもに対しても分けへだてなく親しみをもってかかわることができる。」などが代表的な課題であった。

この使命感や教育的愛情に関しては、授業中や休み時間など、学校生活で子どもと関わる場面を思い浮かべることにより、比較的容易に課題設定ができたようである。また、「えこひいきをしなさい」など、子どもたちに不公平感を持たせないという記述も多く見られた。

【社会性や対人関係能力について】

実習Ⅰ「学級・学校観察」の達成目標「教師の協働、学級・学校運営上の役割についての理解を深めることができる。」に関する学生の代表的な課題は、「掲示物や黒板の使い方などを観察し、そのねらいや良い点を考える事ができる。」などで、実習Ⅱ「児童生徒指導」の達成目標「子どもや学級集団の実態に応じて担任教師や実習生と協力しながら、子どもの指導を行う事ができる。」に関しては、「自分一人で決めず、時には先生方や他教生と情報交換を行い子どもの様子を把握する。」などであった。

この事項については、実際に仕事をしたことがないために学級や学校運営、そこにおける協働の実態をイメージしづらく、学生にとって課題を作るのが難しかったようである。課題を設定するためには、あらかじめその項目の意味を学生に理解させることが必要である。実際に学校現場を観察する際には時

間が十分にとれず、教師の協働や学級経営、特に学校運営について、見る機会をほとんど持てないことから、次回からは協働のみに焦点を絞り、学級及び学校運営については無理に課題をつくらせなくてもよいと考える。

【幼児児童生徒理解について】

実習Ⅰ「学級・学校観察」の達成目標「教育現場の実態と子どもの生活面における発達、児童生徒指導上の実態を理解できる。」に関する学生の代表的な課題は、「積極的に児童に接し、子どもたちを理解することに努める。」などであった。また、実習Ⅱ「児童生徒指導」の達成目標「子どもの生活面における発達や学級集団の実態を深く理解し子どもの指導を行う事ができる。」については、「子ども同士の人間関係を理解・把握しつつ、公平に接することができる。」などの課題が作られていた。

この幼児児童生徒指導についての達成目標は、子どもたちの生活場面を、学生の自らの経験などから想起しやすく、自分の課題を考えやすいものであったようだ。また、教育実習に向けた準備をすることにより、教師として自分が子どもたちにどう接すべきか、理想とする教師は子どもたちにどう接するのかという観点があらかじめ深まっていたとも考えられる。そのことが、実習Ⅰの学生の課題に比べて実習Ⅱの方が、より具体的なものになっていることに反映されているのではないだろうか。

【教科等の指導能力について】

実習Ⅰ「授業観察・参加」の達成目標「子どもの学習面における発達及び課題を理解し、学習指導を行う上での課題を持つことができる。」は、「来年の本実習での授業を想定できるように、どのような展開で進めたらよりよい学習効果を得られるのかを考える。」などであり、実習Ⅱ「授業」の達成目標「子どもの学習面における発達に応じた授業を行うことができる。また、学習指導を行う上での課題解決に向けて努力する事ができる。」についての学生の課題は、「子どもの個人差などの実態に配慮しながら授業をし、教材や教具を工夫することができる。」などであった。

特に実習Ⅱにおいては、この事項・教科等の指導能力を磨く授業が中心となるため、学生たちの課題は、より具体的になっている。しかし、実際に授業を行うにあたって、その時間の目標をつかみ、指導案を立て、教材を準備することが必要であり、実際

の授業においては、教師による課題の提案や机間指導、子どもたちへの言葉掛け、発言に対するの応答や終末でその時間の内容をどうまとめるかなど、学生たちに求められる指導能力は多岐にわたる。それらを明確にし、学生自身の目標設定の助けとなるように、実習Ⅱの小学校においては、表3（特に「①

学習指導」をあらかじめ示した。この事によって、ポートフォリオの達成目標の「授業」の部分が具体的に、教科等の指導能力として何を身に付けたいのかを学生たちは把握できたと考える。そして実習の終了時には、この表についても振り返りを行わせた。

| | 項目 | 達成目標 | 顕著なものに○※ |
|------------------------------|-------------------|---------------------------------|----------|
| ① 学習指導 | 教材研究 | ○指導目標の的確な把握と深い教材解釈を行える。 | |
| | | ○教材研究を主体的に取り組むことができる。 | |
| | 指導計画 | ○授業の具体的な目標設定と展開の工夫が行える。 | |
| | | ○子どもの実態に基づき個人差に配慮して指導案の立案が行える。 | |
| | | ○正確さと計画性がある学習指導案の立案が行える。 | |
| | | ○教材・教具の工夫と周到な準備が行える。 | |
| | 指導の 実際 | ○子どもに興味・関心・意欲の持続や高まりがみられる。 | |
| | | ○子どもの理解度を把握し、能力差に対する指導が行える。 | |
| | | ○創意ある指導を展開できる。 | |
| | | ○具体目標を達成することができる。 | |
| | | ○落ち着いた指導態度、適切な話法、支援が行える。 | |
| | | ○適切な板書、資料・教材、機器等の効果的な利用ができる。 | |
| | | ○適切な時間配分で授業が終えられる。 | |
| | 指導後の 整理と 反省 | ○教材・教具等の片付けを行える。 | |
| | | ○授業後の反省と適切な自己評価を行える。 | |
| ○観察記録の適切なテーマ設定、内容記述及び考察を行える。 | | | |
| ○観察記録など、提出物の期限内提出ができる。 | | | |
| ○授業観察を望ましい態度で行うことができる。 | | | |
| ② 児童 生徒 指導 | 子どもの 理解 | ○子どもと積極的かつ公平にふれあうことができる。 | |
| | | ○発達段階、個人差、行動等子ども一人一人の観察と理解ができる。 | |
| | 児童生徒 指導 | ○子どもの基本的な生活習慣の指導を行える。 | |
| | | ○子どもを掌握し、信頼されている。 | |
| | | ○清掃活動、給食指導への積極的な参加と指導助言を行える。 | |
| ○子どもの健康・安全に対する配慮ができる。 | | | |
| ④ 勤務 | 実習態度 勤務状況 | ○子どもへの教育的愛情と教育に対する熱意・向上心がある。 | |
| | | ○実習生としての謙虚な態度で実習に臨むことができる。 | |
| | | ○教職員・同僚との協調して仕事をすることができる。 | |
| | | ○学級反省会や研究授業研究会に積極的な態度で参加できる。 | |
| | | ○教師・社会人としての自覚と責任ある言動がとれる。 | |
| | | ○実習日誌、実習全体の的確なまとめと自己分析を行える。 | |
| | | ○出勤および勤務時間、規則などの遵守ができる。 | |

表3 教育実習Ⅱの①②④における具体的な達成目標表

(2) 各々の達成目標・自分の課題についての考察
ポートフォリオにおいては、それぞれの活動ごとに、達成目標と「自分の課題」について A（十分にできた）、B（おおむねできた）、C（あまりでき

なかった）をつけて振り返りを行わせた。まず実習Ⅰの自己評価であるが、授業観察や学級・学校観察における「教師の使命や教育的愛情について理解し、子どもの成長・発達にかかわりたいという気持ちを

持てる。」という達成目標は、A の評価が多かった。一方、授業観察の「学習面における発達及び課題の理解、学習指導を行う上での自分の課題を持つことができる」と「教師の協働、学級・学校運営上の役割について理解を深めることができる。」「教育現場の実態と子どもの生活面における発達を理解し、児童指導上の実態を理解できる。」は A が少なかった。1 週間の短い期間で数十時間の授業を観察するだけで子どもたちの学習面での発達を見てとる事は容易ではなく、更に学校全体を観察し教師の協働まで見てとるのは困難であろう。しかし、そういった状況の中でも、学級・学校観察を行って実習Ⅱへの心構えを持たせたかということに関しては A が多く、自分たちなりの学びができていていると考えられる。

実習Ⅱにおいては、実習Ⅰと同じように「使命感や責任感、教育的愛情」の項目で A が多く、「社会性や対人関係能力」においては教師らしさを意識した言動と服装や、他の実習生との協働という項目の達成目標において A が多くなっている。一方で達成目標「子どもの発達や学級集団の実態をもとに学習指導案を書く事ができる。また授業における児童生徒上の課題解決に向けて努力する事ができる。」「子どもの学習面における発達に応じた授業を行う事ができる。また学習指導を行う上での課題解決に向けて努力することができる。」という項目の評価は低くなっていた。やはり実際に授業をしてみると、学習指導はそう簡単ではないということを実感したということであろう。さらに実習Ⅱの児童生徒指導では、子どもの生活場面における発達や学級集団の実態を深く理解し子どもの指導を行う事ができる。」「子どもの学習面を支える状況を理解し、自分なりの課題を持って、解決に向けて努力する事ができる。」が低かった。所属学級の担任の方針などもある、学生が子どもの指導に躊躇することや、授業だけで手一杯な状況というのがわかる。

附属小学校で配布した「教育実習Ⅱの①②④における具体的な達成目標表」は、実習の終わりに学生自身が自己評価を行うと共に、その学生が実習で担当した教科等の指導教員全員が、実習評価に基づいて、達成度が顕著なものに○をつけて学生に返却して他者評価とした。指導教員からの評価が高いにもかかわらず、学生自身の自己評価が低い者がいる反面、教員による評価が低いのに自己評価は高い学生も存在する。評価について、初めの構想は A, B, C

をつけるものであったが、指導能力についての直接的な評価であり、学生たちにとって励ましの意味での評価になりえるかという声があったために、期待を込めて顕著なものみに○をつける形になった。

なお、実習全体の総括評価では、実習Ⅰ、Ⅱとも C は殆ど見られず、実習Ⅰの A が 3 割、実習Ⅱの A は 2 割で、その他が B という評価であった。何れの実習も大変ではあったが、それなりに充実した活動とできたのではないだろうか。

4. 今後の課題

今回の試行から、達成目標の総数が多すぎたことと、予想していたとはいえ達成目標の中には実習ⅠとⅡで学ぶことの難しいものがあることがわかった。このことから、来年度は達成目標の数を整理し、文言を学生に理解しやすく改善して、説明や自分の課題作りについても十分に時間をかけ、実効性のあるポートフォリオ学習を目指したいと考える。

「教育実習Ⅱの①②④における具体的な達成目標表」については、実習期間の半ばと最後に学生に評価を返すなどして、来年度は附属小学校と中学校、特別支援学校でより細やかな指導として試みたい。

実習の終わりにポートフォリオ学習自体についての理解度を問う調査も行った。詳細は省略するが、ポートフォリオ学習実施初年度ということもあり、学生たちも戸惑いが大きく、回答はこちらの質問事項を正確に捉えられていない感があった。これまでは各々の実習についての目標があっても、その活動そのものを何とかこなしていくということに精一杯で、常に目標を意識して実践し、教職に係る自分の力を振り返り、伸ばしていくことができなかつたためではないだろうか。学生たちも指導する教員側も PDCA サイクルに基づく力量形成の考え方を定着させていくことによって、よりよいポートフォリオ学習が行われると考える。

参考文献

- 1) 文部科学省「教職実践演習（仮称）について」、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910/014.htm
- 2) 栃木県教育委員会の教員評価区分、
<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m03/education/kyouikuzenpan/kyoushokuin/koudoukijyun.html>